

10月の「森三郎の作品を読む会」では、

「人形しばる(童話)」筆名 茅原順三

「おばあさんと鬼(昔話)」筆名 茅原順三
を読みました。

「おばあさんと鬼」

この話の主人公は「おだんごのすきな、そして、つまらないことにもよく笑ふ、のんきなおばあさん」である。ある日そのおばあさんがせつせと作っていただんごを一つ土間に落とし、それを追いかけて、穴の中に入り、お地藏さまや鬼に会い、最後には鬼の宝物のしゃくしを持ち帰るといふ昔話である。「鼠浄土」や「宝のしゃもじ」など、昔話のパターンがいくつも詰まった話である。

森三郎がもとにした話は何だろうか。

この話は小泉八雲の「だんごをなくしたおばあさん」とほぼ同じ話である。原題

The old woman who lost her dumpling

今は、光吉夏弥 訳、平山英三 絵(大日本図書)の本を図書館で見ることができる。

通信第4号で取り上げた「赤穴宗右衛門兄弟」の原作は、小泉八雲の「約束」で、兄・森銃三と萩原恭平の訳したものを子ども向けに書き直したものであった。この「おばあさんと鬼」の執筆も、兄・森銃三を通して得た小泉八雲作品への興味関心がきっかけになっているのではないだろうか。

「鬼」が出てくる話とはいっても、「赤穴宗右衛門兄弟」の怪奇な話とは一転して、明るい話である。まだこの時期は、いろいろな傾向の作品を試みているという感じがする。

「人形しばる」

この話はずいぶんミステリアスな話である。

人形つかいの一座が立派なお屋敷に召されて人形芝居をご覧にいれ、褒美に御馳走をいただき、一晚泊めていただくのだが、朝になったら、狐に化かされたと分かる話。

ところが、ごちそうは本物で、実は村の庄屋の家の祝言のために前日から用意していたごちそうだったのだ。

「この山里では、魚などはおいそれとそろえられませんし、こまつたことになりました。」と、村人が言っている。祝言の御馳走の内容がなかなか興味深い。

本膳

お魚と青菜の吸物・大鯛・栗のきんとん・

黒い茸(きのこ)の煮しめ・

白いお芋にアワビの煮こみ

二の膳

鴨の料理・魚のすり身に葛をもちかけたもの・

押鮎(おしあゆ)・乾鳥(ほしどり)・こごもり鮭

酒の肴

雑魚の折づめ・田作りずしを重箱にもつたもの

果物

柿、梨、むき栗などを柏の葉をしいた大皿にもつたもの

そのほか

しじみ汁・サグエの鹽もみ・このわたの皿つき

これだけでもりっぱな民俗史の一断面である。

(次回は、12月14日金曜日です。)